

萩原朔太郎記念
水と緑と詩のまち

前橋文学館報

No.27 2005.3



対談「孤立と連帯」

四元康祐・小池昌代

平成十六年九月四日、第11回萩原朔太郎賞受賞者展覧会「四元康祐―詩のなかの自画像―」初日に際して開催された第78回アートステージで、お二人の詩人に対談をしていただきました。以下にほぼ全文を掲載します。

連詩

四元 こんにちは。みなさん今日は来てくださいます、どうもありがとうございます。それから小池さんも、東京からわざわざ来ていただいて、本当にありがとうございます。

小池 こちらこそ、ありがとうございます。

四元 小池さんと初めて会ったのはもう二年ぐらい前ですけれども、一年前に静岡で連詩の会というのをやりました。(二〇〇三) ずいぶんお世話の会、二〇〇三・一一・二七(三〇開催)

小池 そうですね。はい。

四元 これは、簡単にルールを説明していただくと、どういう遊びだったんでしょうか。

小池 連詩って言って、参加したメンバーは大岡信さん、それから四元さん、そして私、それからオランダから二人の詩人が来たりですね。ヘンクさんとウイレムさん、それで総計四人で、

四元 五人ですよ、五人。日本人三人とオランダ人二人ですね。

小池 そう、ごめんなさい(笑)。五人ですね。それで、最初四元さんが五行書いて、三行、五行、三行ってずうつなげて行くんですね。最初五行彼が書いて、その次にヘンクさんが三行、その次の人がまた五行。ずつとこの五人が連を作って一編の長大な詩を完成させるという試みなんです。

四元 ぼくはそれまでずっとアメリカやドイツで暮らしながら一人で詩を書いてきたじゃない。日本の同人誌とかね、入ったこと

なかったし。それから、榎木伸明っていう親友を例外として、いわゆる詩を語り合うなんてこともなかったから、基本的にものすごく孤独な作業だったんですね。で、そういう中で、みんなと一緒に詩を書くっていうのは、これが初めての体験だったんですけど、でもまあ考えてみたら、それはたいしての人がそうかもしれないですね。詩っていうのは。

小池 そうですね。そうかもなんですけどね、本当に。どうでした、これやってみて。私はやる前にけっこう、人と共同作業で詩を書くっていうことがね、ちょっと、異常事態っていうか。

四元 抵抗があった？

小池 抵抗があったんですよね。四元さんはあんまり抵抗を感じなかった？

四元 ぼくはね、だからそこところが非常に対照的で面白いと思うんだけど、最初はもう全く抵抗がなくて、どちらかというと普段引きこもっている人が、パーティーに招かれて、もう喜々として出かけて行ったわけね。ただ、むしろやっている中で、いろいろな心理的な抵抗感が出てきて、終わってきたときに、詩を書くっていうのはいつたいたいということなんだろうっていうふうだね、考え込むところがあった。つまりその、今日のテーマの、これは小池さんが書いた新聞のある記事の見出しなんですけれども、「孤立と連帯」っていうね、詩を書くことに潜んでいる非常に一人ぼっちのところ、あるいは読むことになって入ってくるたつた一人になるっていうことと、それから詩を読むことで人とつ

ながったり、人とつながるために詩を書いたりするっていう、この関係っていうのが決して簡単じゃなくって、何だかものすごく逆説に満ちあふれているっていうことに、初めて気付いたところがあるんだけど、ちよつとまあ、あんまり抽象的な話よりも、どんなことをやったのか、読んでみましようか。

小池 そうですね、ちよつと読んでみましよう。

四元 これは、連詩を三日ほどかけて作って、「静岡新聞」(二〇〇三・十二・一)にこうやって載っけてもらいましたね、四日目に、地元のホールで、みんなで読んだんですけども、さつき小池さんが言ったみたいに、五行、三行、五行、三行とずつなげていく。ほくはトップバッターで、最初の日の夕食の時に、大岡宗匠から、おまえやれっていうふうに言われたんですね。それで、夜寝ながら一所懸命考えて、次の日の朝、まず、私が五行書いて、その次は、オランダ人、その次は大岡さん、それでまたオランダ人、で、五番目に小池さんなんですけれども、今日はその辺交互にちよつと読みましようか。だから、最初のやつはほくが書いた出だしですね。

一 本当ですか、オランダ語には

「水平線」を意味する単語が四つもあるというのは
ランボーの見たスマトラの海、北斎の見た駿河の海
ウィーナスの下腹のように

わたしたちの眼下で言葉の地平線が上下している

康祐

小池 その次にオランダのヘンクさんがこういう三行を書いてます。

遠方に消えていく水平線
潮とともに縮まり広がる
全ての言葉、ランボーの言葉さえ、私たちの視界から消え去る

ヘンク

四元 次は大岡信。また五行です。

三

消えゆく人の言葉は「遺言」とよばれ尊ばれた
ひどく短い語句であるのが普通だ
正岡子規はふだんから多産な文人だった
三十五で死ぬ時も噴火をやめなかつた
虫の息で 絶筆の句を三句も書いた

信



四元 康祐 (よつもと やすひろ)

詩人。1959年、大阪府生まれ。上智大学文学部英文学科卒業。1986年より製薬会社の駐在員として米国に在住。1990年、ペンシルベニア大学大学院で経営学修士号(MBA)取得。1991年、第一詩集「笑うバグ」(花神社)出版。1994年、ドイツへ転居。2002年、『世界中年会議』(思潮社)出版。第5回駿河梅花文学大賞・第3回山本健吉文学賞受賞。2003年、『嗚みの午後』(思潮社)出版。第11回萩原朔太郎賞受賞。2004年、『ゴールデンアワー』(新潮社)刊行、朝日新聞インターネット版アサヒ・コムに「週刊詩劇場声の曲馬団」を連載。現在、ミュンヘン郊外に在住。

小池 またオランダの詩人ウィレムさんは、

四

低地の国では空を背景にして人は大きく見える
ここ山間の地では

人は死後に新しい名前をもらう

ウィレム

四元 で、次は小池さんですから、じゃあ小池さん読んで下さい。
小池 そうですね。じゃあ。私はこういうのを書きました。

五

灰をつまむ、冷えたひとの指先

三度、拝むと 風がおこり

わたしたちは 塵のようにあちらがわへ吹き寄せられていく
からっぽのコップがぶつかりあう音

生者と死者の おこそかな乾杯

昌代

拒絶反応と絶賛

四元 ここで、最初の一編ずつを五人の詩人たちが初めて交わした、あいさつをしたわけです。それでぼくはね、さっき言ったみたいに、喜々として社交の場に出てって、普段たった一人の言葉を今日は楽しませてやろう、ということ、非常に社交的なんですね。さっきあつたみたいに「オランダ語には」って。オランダから、ほら、お客さん来てるでしょう。

小池 そうですね。あいさつですね、これね。

四元 で、水平線を意味する単語が四つもある。これはどこかで聞きかじった、あ、さっき言った榎木伸明っていうぼくの親友が

訳した小説に出て来る聞きかじりの知識を入れてね、で、ランボーっていうのは、アルチュール・ランボーっていう、フランスの非常に有名な詩人だけれども、「ランボーの見たスマトラの海」。ランボーっていう人はですね、フランス生まれなんだけれども、アントワープの港から船に乗って、ジャワの方に行って、スマトラで失踪するっていうふうなことで、地球半分オランダの方から日本の方へ近付いて来るんですね。で、「北斎の見た駿河の海」と。我々駿河の富士山のおもとまでやってたから、オランダのお客さんを富士山のおもとまでお招きして、そして「ヴィーナスの下腹のようにわたしたちの眼下で言葉の地平線が上下している」。ぼくたち二十五階の高いビルの一室に閉じ込められて、窓から駿河湾が見えた。だから、ぼくとしては何か自分なんて全くなくてね、もうひたすら外国から来た客人にどうやってあいさつして、どうやってお迎えして、どうやってこのぼくらが居る場所、というのを言葉にしようかっていうことに腐心したんだけど、既にその最初の五回にして、そういうことがうまくかみ合わないっていう違和感を非常に強く抱いたんだ。

小池 ああ。そうか。私は人にささげる詩とか、ましてや挨拶詩とか、あるいは人のために詩を書くっていうことを、やったことがなかった。いつも、何かこう、自分の世界だけで完結してしまおうようなところがあつて。そしてまたこれ、五人全員が一緒の部屋で、一緒にいるところで書くわけですよ。一人でね、机の前に座ってるっていうんじゃなくて。私が何行か書いている間、みんな雑談してるわけですよ。いろんな、べちゃくちやべちゃくちや、関係ないおしゃべりしてるんですね。そういう中で詩を書かなくちゃいけないっていうのは、なかなかね、スリリングでかえっておもしろかった。いろんな音が聞こえているにもかかわらず、やっぱり何か自分が詩を書くときには、すーっと自分がひとりになって、言葉と自分の通路がすーっと通い合う瞬間もあった。

まさに今日のテーマの「孤立と連帯」っていうのが、連詩の中で何度もいろんなふうに立ち現れて、おもしろかったですけどね。

四元 小池さんはほんとマイペースでね。自分の中にすーっと入って行くっていうの、端で見ててはよくわかったし、それは後々まで強く印象に残ったんだけど、オランダの詩人たちは、そういうあり方に強く共感する一方で、ほくみみたいな最初の出だしのようですね、言葉をちよっとお祭りの場で遊ばせてやるということに対して、非常に反発したんじゃないかと思えます。ですから、ほくのすぐ後に続けた、ヘンクっていうオランダの詩人は、「遠方に消えていく水平線／潮とともに縮まり広がる／全ての言葉、ランボオの言葉さえ、私たちの視界から消え去る」って、書いたばつかしの、せつかくお客さんを迎えようとして苦心^{くしん}惨憺^{たん}して出したやつを、もういきなり消そうとするわけでしょ。身もふたもないんだよね、こういうことやられると、社交としては。

小池 うーん。(笑) やっぱりあの、何て言うんでしょう。ボクシングじゃないけど、オランダ人とか、簡単には言えないと思うんだけど、やっぱり書く時に、我とか自我とか私っていうのは、ものすごく強くあるのかしらね。

四元 そう。あるんじゃないかしら。

小池 ボクシングしちゃうのかな。相手の出した言葉に、私はこうだっていう何か。

四元 というよりも彼の場合は端的にね、そういう「私」みたいなものが非常に希薄な言葉のあり方に対して、

小池 拒否反応。

四元 ノーっていうのをここで突きつけたんだと思うね。

小池 そうなのね、うん、うん。

四元 そのあと、大岡さんは、また正岡子規とか出てきて、のほんとしてるわけですよ。だからオランダ人はまたここで、けっこうかっかしてんじゃないかと思う。で、だからこそ、この五

番目のところで、小池さんが、「灰をつまむ、冷えたひとの指先／三度、拝むと 風がおこり／わたしたちは 塵のようにならわへ吹き寄せられていく／からっぽのコップがぶつかりあう音／生者と死者の おこそかな乾杯」。こういう非常に原初的というか、自分の心の内奥に静かに降りて行くような詩がやってきた時に、ものすごく彼らは絶賛したわけですよ。それは何かほくから見ると非常に当てつけがましいっていうかき。

小池 (笑) そうだったのか。わからなかった。
四元 え、感じなかった？ そういうの。
小池 当てつけとは考えなかったけど。

四元 だからほくはこころよからすでに孤立を感じ始めましたね。

小池 ああそうか(笑)。最初はねえ、連帯を感じつつあいさつしたのね。

四元 そう。連帯しようとして来たんだけど。だから、何だかね、こういう詩の書き方が、こういう詩っていうのはつまり場とか何



小池 昌代 (こいけ まさよ)

詩人。1959年、東京生まれ。津田塾大学国際関係学科卒業。1988年、第一詩集「水の町から歩きだして」(思潮社)を刊行。1997年、「永遠にこないバス」(思潮社)で第15回現代詩花椿賞、2000年、「もともと官能的な部屋」(書肆山田)で第30回高見順賞受賞。その他の詩集に、「夜明け前十分」(2001、思潮社)、「雨男、山男、豆をひく男」(2001、新潮社)など。「三蔵2」同人。書評・エッセイ・小説・絵本・翻訳も手がける。2001年、「屋上への誘惑」(岩波書店)で講談社エッセイ賞受賞。2004年、短編集「感光生活」(筑摩書房)を刊行。

とわかってことがね、意識の端にもほらない、あるいはそういうことが希薄なものに対して、非常にはつきりと拒絶する、やっぱりこういう詩の書き方があるんだなあ、と、今さらのように思いました。

生きる」と死ぬ」ことを、言葉の上で体験する

小池 この間、大岡さんたちと、この連詩のことでね、ちょっとおしやべりする機会があつて、その時に聞いた話なんですけど、何回かこの連詩をシリーズでやってるんですよ。その中で、外国から来た詩人が、この連詩の最中に、自分の詩法っていうか、自分の詩の書き方を破られるような経験を連詩の中でせざるを得なくなつて、それで、泣き出しちゃつた女の詩人がいたそうです。

私はそれがすごくよくわかるの。泣き出しちゃうような瞬間があるつて。この連詩を経験する中でね、他人の言葉と自分の言葉が接触するということがある。そのとき、本当にその人の手が肉体に触れるような、肉感的な、何かとても生々しいものを感じることもあつたの。ただただ言葉を連ねていつているにすぎないんだけど、ものすごく緊密な関係をこの人たちと作つてるよように感じる瞬間があつたんですよ。日本人である私がそんなふうに思う。ましてや、連帯っていうか場の中で書くなんていうことを普段は全くしないようなヨーロッパの詩人たちが、そういう中でどんなショックをうけたのか。我が破られるような、何だろう、無意識の領域に、素手で、無断で触られたつていうような、きつとすこいショックな、丸裸にされたような何かを感じたんじゃないでしょうかね。私、その時も皆さんにちよつとお話したんですけど、もしかして、昔の日本人たちつて、俳句とか歌を連句や連歌つていう形でやつて行く中で、きつとそれが、心の治療

になつてたんじやないかなあつて思つて。集団的な治療つていうのかな。精神的な、すこく現代的な言い方しちゃえばね、精神的な治療。

四元 セラピーね。

小池 セラピー。うん。だから、その外国から来た女の詩人が泣き出しちゃつたつていうのも、集団の中で、何かしら心が、非常に今まで使わなかつたものを使つたことで自分が壊れて、ショックを受けるのと同時に、非常に深い慰めを得たのかもしれない。と。セラピーとしての作用もあるんだらうなあつて思いました。

四元 この連詩が終つてしばらくして、小池さんが、岩波の「図書」つていう雑誌に、「連詩の時間」ていうエッセイを書かれましたね。その中で、ぼくは読んで、非常にびっくりすると共に感動したんだけど、こんなことを言つてますよ。

連詩とは、まるで、生きる」と死ぬ」ことを、言葉のうえで体験するようなものだ。自分の最後の番が終わり、それを次のものへ手渡したとき、わたしは、心から解放されたが、そのとき、わたしには、よろこびと、そして同じくらいの重さの非常ななみしさが、やつてきた。わたししんが死ぬ瞬間も、こんな感じなのではないかしらと、思わせるような一瞬だった。

〔図書〕二〇〇四・二一

本当に、そういうふうな思つたの？

小池 あの、全部で四十作つたでしょ。四十編のかけらが、大岡さんがまた最後に墨でそれを全部書いてだーつとはられたんですね。それを見たとき、言葉が連なつていられるだけなんだけれど、人の一生、言葉の一生涯を眺めわたすような気がしちやつて、自分が最後の番が終つて、次の人にじやあこれお願いしますつて渡したとき、すこく寂しくなつちやつたですね。そういうことなか

った?

四元 そうねえ。だからぼくはそれ、最初のころは全くなかったのね。最初のころっていうのは、連詩を始めたころは。つまり、どうやってエンターテインするかってね、言葉っていうものを。

小池 すごく意識的なのね。

四元 うん。あるいはね、小池さんも含めて、特にオランダ人の詩人は、その与えられたものに対して自分がどう答えるかっていうことに、ものすごく集中しているように見えたの。こっちはね、どちらかっていうと、全体の流れとかね、何度も何度も最初から読んでね、もう、ここでこういうイメージは出てきているから、こっからはこれは使えないだとかね。

小池 そう。オーガナイザーなんですよ。

四元 いろいろ一所懸命考えてるわけ。

小池 そうなの。それはね、私にはできないこと。それはね、四元康祐っていう人の特徴であり、大きな個性だと思っただの、私。全体っていうのを常に考えられるっていうのはね、私はやっぱりこの人は経営者じゃないけれども、そういうビジネスの世界でもね、出世した人だなあって、つくづく思いましたね。

四元 (笑) でもね、やっぱり、次の詩を渡すときに、自分が本当に死んだようになつていう、そういうことに比べると、すごく浅はかに感じませんか? そういうのって。

小池 そんなことないですよ。

四元 なんか、商才はつか長けてるような。

小池 (笑) そんなことない。必要なことですよ。

矛盾とジレンマ

四元 だんだんぼくは、そういうコンプレックスに打ちのめされ

てきたんです、やっつくにつれて。ちょっと真ん中の辺、読んでみましょう。第十四番から。いろいろテーマが、言葉から始まって、女性が出てきたり、つまり、人に移ったりして、それから、少しずつ現代の不安感みたいなどころに入ってくるのであります。十四番。これ、私が作りました、三行。

十四

ほんのりと光った梅の花を透かして吠え騒ぐ犬どもがきこえる
その庭の片隅でエラスムスとモアはまだユートピアを語り続け
ている

女たちは戦場へ赴く息子たちの世話に忙しい

康祐

で、小池さん。

小池 で、私が、

十五

ジャガイモが芽を出し たまねぎが腐る 流しの下
どぶねずみたちが 来るべき王国の相談をしている
遠方で鳴る、小太鼓とシンバルの派手な軍曲
だんだん近づいてきて 家の前でとまった
あれは何の知らせ? 曇天の月曜日

昌代

四元 ちょっと前後するんだけど、ぼくの詩の一個前にまた、ヘンクが書いている五行があります。これは、

十三

ベルが鳴ると 彼らはよだれをたらし始める 食いものがかかる
とわかって

それ以来、彼らの数はますます増えていく

(興奮して立ち上がって歩きさえもする)
夜になると皿をもつてテレビの前に集まる
そして彼らの食事をコックがテレビで料理するのをよだれをた
らして見ている
ヘンク

で、ここでもまだ、ぼくの苦しみは続いててね。つまり、ヘンクさんが、テレビの前に集まる貪欲な犬どもっていうイメージを出すでしょう？ そうすると、ぼくとしてはそれをどう料理しようかって、一所懸命考えるわけですよ。ちょうどそのころ自衛隊をイラクへ派兵する問題があったし、そうだね、発表した日に日本の外交官が二人射殺されていて、そういうことが話題になってた。オランダも、軍隊をイラクに派兵してて、食事の時も、今生きてる時代の閉塞感だとか、ばかばかしさみたいなことが、話題にのぼりましたね。そういうものをこの連詩の中にぼくとしては織り込んで行きたいということ、「ほんのりと光った梅の花を透かして吠え騒ぐ犬どもがきこえる」。「梅の花」っていうのは、あの辺りきれいな梅の園があったりして、その中で、「エラスムスとモア」。エラスムスっていうのは、オランダの哲学者ですね。暗黒の時代に、知性の光明を目指して、何とか生き延びようとした人。トーマス・モアっていうのはその親友のイギリス人だけれども、王様にたてついて首はねられて、エラスムスは親友だったから、その直後につくりきりて早死にしたりしている。で、「私たちは戦場へ赴く息子たちの世話に忙しい」っていうイメージにつながるんだけど、そのあとで小池さんが、さっきのような、台所に立った、非常になんていうか地に足が着いた書き方で、基本的に同じテーマをよむんだよね。また、戦争みたいな。
小池 ああ、そうですね、うん。「軍曲」とかね。軍隊の曲。
四元 「あれは何の知らせ？」「小太鼓とシンバルの派手な軍曲」が「だんだん近づいてきて」。ここでもまたオランダの詩人たち

は、おーって、ものすこく傑作だ、傑作だっていうわけ。

小池 オリンピックじゃないですけどね。妙に誇らしい気持ちになっちゃったりして。いやあ、私の詩って日本でそんなに褒められてないんですけど。これもそれほどいいとは思えませんが。きつと翻訳をしてくださった近藤(紀子)さんに感謝しなきゃいけないのかも知れませんが。(笑)
四元 でね。ぼくから言わせるとさ、ひがむわけじゃないけど、連詩っていうひとつの流れから言うとな、ヘンクが、あんまり規定されていないけれども非常に貪欲で暴力的なイメージを出した、で、ぼくはそれを戦争に付けた。で、小池さんは、また戦争だから、なんかそこで足踏みしてて、本当はこれよくないと思うんですね。
小池 そうねえ。よくないと思いますね。(笑)



四元 (笑) だけでも、そういうことに、彼らは全く、つまりオランダの詩人たちはそんなことどうでもいいわけ。

小池 あはは。そうなの。

四元 彼らは、むしろ、言葉の出る出方のところにすごく強く反応するんだね。

小池 なるほど。そうなんですね。出方に注目してるっていうか、おもしろく思ってるのね。

四元 だからぼくはそこら辺で衝撃を受けるわけですよ。

小池 衝撃って、何で? (笑)。

大岡さんはお師匠さんとして、やっぱり連詩っていうのは足踏みじゃなくて、前の人のイメージを飛ばして、遠くまでどんなふうに乗るのか、ジャンプしてちよつとちがう世界を展開させたり、あるいは、思わぬ別のイメージを出したりっていう、何て言うんでしょう、ひもを引くような、ちよつとそこもうちよつと右、とか、もうちよつと左、とか、かじ取り人なんですよ。で、私のようにしよつちゆう足踏みしちゃったりするのは、本当の、本来の連詩・連句・連歌の世界からすると、ちよつと素人のやり方っていうのかしら、あまりよくないというふうにされている手法なのかもしれないんですけど、つい私はそうやってしまったんだけど、彼ら、オランダの詩人たちはそれは、あまり……。

四元 圧倒的に支持するわけですよ。だからぼくはここで危機に瀕してさあ、自分の詩のとらえ方とか書き方っていうのはなんか根本的にまちがってんじゃないかみたいになぶりに、大げさに言うんですよ、ちよつと思出ししたんです。だから、そのちよつと先の、十九番で、こんな詩を書き始めたんですね。

ここんとこ全部、ヘンク、康祐、昌代っていう順番が続いてるね。

小池 ああ、そうね。

四元 で、十八番でヘンクさんが、この人もだから相変わらずお

んなじことやってるんだね。

十八

武器、壺、鍋は発掘される

暗雲が 人生のすべての音を持つていつてしまった
我々は謎に浸されている

ヘンク

っていうでしょう。で、その次に書いたのは私の五行です。

十九

いつのまにか笑顔の仮面が張りついてわたしは声がない
流れこむ日々の感情が淀んだまま臭いを放っている
わたしのなかの運河の扉を開いてください

あなたに連なることさえできれば時計は針を正してくれるだろう
たとえそれが喜びよりもっと深い悲しみを伴うとしても

康祐

小池 そして、私が

二十

接触し 感電し 一瞬の炎をあげる言葉たち

おののき 遠のき また 近づく

次第に重みを増す荷を積んで けれど船は 重い波をわけ ぐんぐん進む
昌代

連詩をやっていると、大きな船と一緒に乗って、ぐんぐんぐんぐん波に乗って最後まで行って、やっぱり船旅には終わりっていうものが来て、旅の終わりっていうのはやっぱり寂しい気持ちにな

るんですよね。だから、それが人生に重なって、たかだかこの四十の詩のかけらを作ったにすぎないんだけど、それが、本当に生涯を終えたような感触、私はまだ終えてないにもかかわらず、予感としてすごく似ているんじゃないかっていう感じがしたんですね。

私、大学で連詩の試みみたいなのを、ちょっとね、学生たちとやったことがあるんですけど、いつも私の授業を眠りながら聴いている大学生たちも、目を爛々と輝かせてた。一行書いては次の人に渡し、で、二十行ぐらいの詩を作るっていうことをやったんですけれどね、みんな、非常に興奮して、すくおもしろい授業になったことがあります。皆さんも、そんな機会があったら、私たちがこんなふうに話してるよりもっと肉感的に、肌身で、このおもしろさと恐ろしさとを感じられるかもしれないけれども。

四元 今この十九と二十を読んだのはね、ここで、何か逆転した。つまり、ぼくは、要するに連詩をやってるんだけど通じません、ていう詩をここで書いてるわけです。「わたしは声がない」とか。「流れこんだ」「感情が淀んだまま臭いを放っている」とか。「わたしのなかの運河の扉を開いてください」というふう

に。

小池 それはわからなかった。(笑)
四元 (笑)で、むしろ小池さんやオランダの詩人の方が、このときちょうど二日目でしょう。だんだん乗ってきて、喜々としてやり始めてるよね。

小池 なるほど。

四元 ですから、二十番でね、連詩の賛歌みたいなことうたってらるでしょう、小池さんは。「接触し 感電し 一瞬の炎をあげる言葉たち」「船は 重い波をわけ ぐんぐん進む」。こっちはさあ、淀んで動きませんとかって言ってるのね、二日目でなんか完全に逆転したっていうふうには思わなかったわけね。

小池 あ、私でも、今話きいてね、四元さんっていうのは、そういう矛盾をいつも抱えてジレンマに落ち込んで、苦しんじゃうっていうところがおもしろいっていうか、端で見ていておもしろいですね。そういうところあるわね。私はあまり考えないで、最初はすく、いやだわこんな、公開で皆さんと一緒に詩を書くなんて、そんな、なんだか抵抗あるわ、と思いつつも、やってみれば、考えなしにそこに飛び込んじゃうみたいなのがあるけれど、やっぱり、四元さんは、始終、これはどういう意味を持つのかっていうのを、書いた後できつちり考えて、そして何かそこでものすく迷いが生じたり、悩みが生じたり、すく考えるでしょう。そうじゃない?

四元 そうですね。だから、最初は考えてないんですよ。小池さんの方がなんか最初一所懸命考えて、苦しんでやるだけけれども、案ずるよりも産むがやすんだわ、みたいな感じ。

小池 やっぱり女はそういうところが。

四元 だから、ぼくとそこが非常に対照的だったと思う。これ、全部で四十編の中の、十九と二十のところ、ちょうど折り返しのところだったんですね。

小池 そうですね。

四元 そこでなんかね、入れちがいました。

大きな体験

四元 あんまり連詩の話はつきりしててもなんだけど、このあたりは、たとえば二十七番、これ、三日目の朝だけれども、もうね、人と人をつなぐための詩とかね、そうことを考えるのはやめよう、どうでもいいということ、

小池 もういやになっちゃったのね。

四元 全くその、個人的な、プライベートな詩を書きました。二十七番。

二十七

黄ばんだ掛け軸がゆつくりと夜風に翻る

その前で扉を叩いているのは九州で一人暮らしをする老いたば

くの父だ

彼の息子とそのまた息子はいまクレタの人江でウニを叩き割つ

ては食べている

父もかつて故郷の海辺でそうしたがこのころはスーパーで買っ

てきてたべるばかりだ

父の父は父の夢のなかを漂っている、プランクトンのように小

さくくなって、仄かに光って

康祐

小池 いいですね。この五行の詩は私、好きです。あの、連詩をやっていると、ここにも父の父っていう人が出てきたり、彼の息子とそのまた息子とか、もう死んだ人とか、生きてる人とか、自由に混ざり合ってきちゃうような空間が作られる。四元さんの受賞詩集の「曙みの午後」にも、死んだ人たちがいつばい出てくるでしょ。中原中也が出てきたり。これは偶然こういうふうになつちやつたんですか。自分でも死んだ詩人たちとおしゃべりしてみたいなあっていうような。

四元 うん。

小池 四元さんと実際に話していると、本当に、あ、この人死んだ詩人なのに、まるで生きてるみたいに話すなあ、とか、時空を飛び越えちゃう時があるでしょ。きつと四元さんの中には、死者も生きてる人も、いつしよくたのレベルで同席してるんじゃないかなあ、と思うことがあるんだけど。

四元 小池さんは、きつきの「連詩の時間」っていう、連詩をやっ

たあとのエッセイの中で、「どんな言葉も、その源をたどっていけば、いつもきつと死者にいきつく。」って書いてますね。「数からいえば、いま、生きてるわたしたちよりも、常にいつも、死者のほうがずっと多い。」

小池 そう。いつもそうですよ。どんどん死者は増えて行くしね。絶対、数では勝てませんよ。

四元 「言葉というものをささえているのは、死者たちであるといつてもいい。そういう意味でいえば、そもそも詩を書くというのは、生死さえも越えた、大きな共同作業であるともいえる。」

小池 だから、五人で作っているけれども、本当はその五人のうしろに、死んだ人たちの影とか亡霊とか、言葉の出てる源には、そういう死者っていうのがあるって、そういう意味では、誰と一緒に連詩してるのか、そのうちわかんなくなつちやつて来ちゃうような感じもありましたね。

四元 そうですね。だから、あんまり結論付けたりするのはよくないんだけど、ぼくはその、最初、タキシード着てパーティーに行くような気持ちで詩を書き始めて、妙な拒絶感とか違和感を味わって、途中で開き直ってね、場のこととか、流れとかもう全然無視して書いたら、ようやくそこでね、ちよつと受け入れられたんじゃないかという印象がありました。それはぼくにあって、すごく大きい体験だったと思うんですよ。あの書いてた仲間たちが、もしも連詩ということにたけた、何度もやつてるような日本の詩人たちだったら、きつとああいふふうにはならなくて、それなりにわいわいがやがや最後まで行ってたんじやないかと思うんです。

小池 ええ、ええ。

四元 それがそうじゃないオランダ人なんていう、ドイツ人もそうだけれども、自我の層が非常に強い詩人たちであり、それから小池さんという、共通してるところもすごくあるけれども、どつ

かでかなり対照的にちがって、なんかぼくよりもっとも自分の内面というのを深く持っていてね、いつもそこから、他がどうであれ、流れがどうであれ、主題がどうであれ、そこからしかスタートしないみたいになかたくなさを持つてる人とやることで、自分にとつてもものすごく意味のある体験になったんじゃないかなあと思います。

小池 よくわかりますね、今の。

対詩

四元 えーっと、それでね、その連詩っていうのをやったのは去年の十一月ぐらいだったかしら。

小池 そうですね。十一月終わりごろ。

四元 それからしばらくたって、ある雑誌の方から、二人で、今度は連詩じゃなくて、対詩をやりませんかというお話がありました。

小池 今度は二人だけの。

四元 対詩。二人だけで、行数とか、そういう規制も一切なしで。ぼくは連詩の経験の後だったから、一種の芸とか言葉のお祭りじやなくて、言ってみればあのオランダ人のように、あるいは小池さんみたいに詩を書くっていうことに、非常にあこがれていて、そういう形での対詩にもものすごく興味があつて、で、もちろん相手が小池さんだし、大喜びでそれを始めたんですね。最初はぼくから小池さんに送ったんだけど、その時に浮かび上がってきたのは、小池さんが連詩の会場で、さつきほら、目の前がすーっと何にもなくなつて自分ひとりに戻つて行くつて言つたけど、横から見てそれが有りありとわかつた。その光景ですね。小池さんがすーっと半目閉じて、そこにいるんだけど急にいなくなつて

行くような様子。これが、すごく頭の中に浮かんできて、たまたま小池さん、昔ヴィオラ弾いてたんだなんていう連詩の最中の会話もあつて、まず、こんな詩を、小池さんにぼくは送りました。だから、これはある意味では連詩の延長線で書いてる詩なんだけれども。

1 ヴィオラ

ええ、母が持っていたのは
ヴァイオリンでもチェロでもありません

四元康祐

でもぼくは母がそれを弾くの聴いたことがない
家に楽器はあつたけれど

弓がなかった
まだよちよち歩きだったぼくが
折つてしまつたから

ぼくの名前にもゆみという音がある
檀という字、弓を切りだすための木なのね、母はいつも
そう云つてぼくの名をひとに教えました

(旧姓は遠くに捨ててきた光る切符だ)

そんな一行を書いておきながら
自分では名をあらためぬまま詩を書きつづけた

川のほとりに生まれ育つた母は
からだのなかに瞼い水を湛えていました
机のまえでそつと目を閉じて
覗きこんでいた

その面に映るもののかげを
かすかに揺らしていたひくい響き――

なぜ、ヴァイオリンでもチェロでもなく
母はヴィオラを選んだのか？

事物のなかに無言の劇をみる事ができたひとです
鳥たちに啄まれるペランダのパン屑に
たとえば自由を

慌ててぼくを制止しようとしたまだ若い母に

もうへし折ってしまつた弓のさきで

ぼくが指し示した窓の外

その曇天のしたを母が徘徊しています

衣服を剥ぎとられた

あられもない魂を人目に晒し

ぼくの耳には聴こえない主旋律に呼ばれつつづけて

2004.2.28

対詩「詩と生活」(「現代詩手帖」二〇〇四・五)

小池 いい詩ですね。その四元さんの詩を受けて、私はけっこう
苦しんじやったんですね。最初やつぱり書けなくて、本当に書け
ないっていうことを書けばいいんだなと思って、「井戸の蓋のうえ
の石」っていうのを書いたんですけど。

2 井戸の蓋のうえの石

小池昌代

返事というものは書けないものです

(詩を書くといつても 詩というものが 本当は一生書けない
ように)

ことに送られたものが 完璧なものであればあるほど
あなたは詩に ハンロンしようとしたことがある？

そして詩は わたしにとつて

いつも全体を瞬時に覆うもの

決してなにものかの一部分というようには

存在しえないものだった

詩の読み方は

対立でなく

そのなかに身も心もくるまれることによってしか成り立たない

ものなら

そして対話とは対立でもあるのだから

だから詩によって対話するという

そんな矛盾を

そんな馬鹿げたことを

そんな困難を

わたしはなぜこんなふうに始めてしまったのだったか

いまこの瞬間に後悔し

後悔したことを

こうしてようやく書き付けていることに

自虐的なよろこびを感じている

あなたから届いた 言葉のブツは

わたしの子に憑依して語られた

そのときあなた自身はどこにいたの

わたしが思い出していたのはひとつの言葉

いつか強風が吹きすさぶ海辺の町を

並んで歩いていた時、あなたが言った

ノンセルフという言葉だった

ノンセルフ

なんと恐ろしい言葉

きょう 物干し台で洗濯物を干しているとき

——心に余裕があつて天気の良い日、洗濯物をほす仕事わたしは好きです。洗うことよりも、ほすことが、ね。まだ濡れている、洗われたばかりの衣服、ひとが脱いだ皮膜をクリップでとめていくとき、そのとき着るひとの身体も魂も、ここでないどこか遠くのほうにいる。わたしはなにか、べろべろとした、とてもなつかしいからっぽをさわっている。その感触が好きなのだと思えますけれど——

風がふいていて

桜の花弁がどこからか舞つてきました

移動し旅する無数の花弁を見て

わたしが 信じられたのは

見えていない 一本の桜の木の实在でした

言葉もまた この花弁のようなものか

それはどこから生まれてくるものなのか

あなたというからっぽ

からっぽの井戸

井戸の底に広がるざらざらとした暗闇は もう誰のものとはい

えない領土

「アイルランドの地誌」に記述があるという、ひとつの物語をわたしはこのころ忘れられないでいる

それはネイ湖ができた由来——獣との姦淫をこよなく好んだという、アイルランドのある部族。そこにあつた井戸の古き伝

えのこと

蓋 開け放ちおこなかれ

水 押さえ切れぬゆえ——

少年のあなたが きつとどかしたに違いない 古い井戸の 蓋

のうえの石のこと

*キアラン・カーソン「琥珀捕り」 榎本伸明訳から

2004.4.7

対詩「詩と生活」(「現代詩手帖」二〇〇四・五)

あの、アイルランドのある井戸のお話にこういふのがあつたらしいんですね。古い井戸、蓋をしておかないと、その底から水がおさえられないようにあふれちゃうから、必ず蓋をしておけという。その、蓋のうえの石というのには、もうひとつ、おもしろいエピソードがあるんです。オキーフというアメリカの画家がいますよね。この人が晩年過こして暮らした家の写真集を見たことがあつたんです——あの、写真といえは、四元さんもすく素



敵な写真、皆さんもご覧になったかもしれないんですけど、撮られるんで、そのこともちよつと後で聞きたいんですけど——わたしが見たのは、井戸の蓋のうえに、石がぼつんぼつんとふたつ並べら

れた写真。オキーフは、晩年ひとりぼっちになったときに、使用人である庭師の老人と、その蓋のうえにね、碁石のように石を置きあう、ちよつとしたゲームみたいなことをしたそうなんです。ある日オキーフが石を置く。そうすると、また次の日に、その庭師がもうひとつの石を置く。次の日オキーフが石の角度をちよつと変える。また次の日見ると、今度は、庭師が、自分の置いた石の位置をまた少し変える。そういうふうには、何の言葉もないんだけれど、置いた石の角度をちよつとずつちよつとずつ変えたりすることで会話をした。私、そのエピソードにとっても惹かれて、そのことが、アイルランドの民話ともばつと結びついて、対詩の中で、書いてみたんです。

四元 今おっしゃった、石が何気なく置いてあるんだけれども、そこに意味が込められて、それが言葉みたいだね、会話にもつながるっていうのは、ぼくが、一編目の「ヴィオラ」っていう中で、小池さんの息子さんが、今まだ小さいけれどももつと大きくなってしゃべってるわけですね。で、母はなぜヴィオラを選んだんだろう。ヴァイオリンでもチェロでもなくて。事物の中に無言の劇を見ることかできた、そういう人だった。鳥たちに啄まれるペランダのパン屑に、たとえば自由っていう、そういう概念をみることができる人だった、みたいなこと言ってるんだけど、これにはネタがちゃんとあつて、小池さんが昔書いた詩のなかに、同居人がペランダの雀のためにパンをばらまいた、そのパンの置き方、散らばり方を見てると、急に自由っていう言葉が響いた、という一節がある。だから、小池さんの中にはもともとそういう感性みたいなものがあるんでしょね。

小池 そうですね。ありがとうございます。蓋のうえの石とパン屑が、不思議なところで結びつきました。このパン屑について、ちよつとだけ、説明しますと、ペランダにはばらばらつとまかれたパン屑を見たんです。その、アトランダムな、めちやくちやな

の置き方、その、ばらばらつと、何の意図もなく、えさのパン屑をまいたときの瞬間の心が、パン屑に表れているような気がしたんですよ。あ、このパン屑の配置っていうのは、そのまいた人の瞬間の心がそこに移ってるんだと思って、そのアトランダムな、すこくランダムなパン屑のあり方に、自由っていうものが見えたような気がした。ああ、こういうパン屑をまく人の心ってすこくいいなあ、と思つて、別に、ほらこれがえさだよ食べに来いって、期待したり、ものすこく熱望したり切望したり、そういう強い心じゃなくて、何かこう、放心したような、好きなように食べな、好きなように来て啄んで行きなさいっていう、相手にゆだねる、放心した自由が見えたような気がして、すこく惹かれたんです。

からつぼの詩人と内面

四元 ぼくから言わせるとそれは、内面っていうものを信じてる人の見方であつて、この詩の中でも、「母」は「からだのなかに眠い水」がちゃんとあるんですね。それに対してぼくは本当にからつぼだつていうふうには思つてたわけ。で、若いころ書いた詩の書き方とか、けつこう鼻歌を歌いながらも詩は書けたりしてたのね。**小池** すこい。

四元 からつぼの中にいろんなものを入れて、遊んでるみたい。だけど、連詩の時に小池さんは自分の中にぐーつと入ろうとしてた。なんかあるんだよね、きつと。この「ヴィオラ」の中で息子さんは、最後の行で、「ぼくの耳には聴こえない主旋律に呼ばれつづけて」っていうふうには言ってるんだけど、その「ぼく」っていうのは、生身のぼくにもかなり重なつて書いたんだけど、逆に言うと、こういうことを書き始めたっていうことは、ぼく自

身がね、やはり詩を書くっていうのは、コピーじゃないんだから、あるいは言葉あそびや、もつと言うならば、俳句をひねるっていうことよりも、もう少し、何かそれを書く自分自身につながって行くところがあるんじゃないかってことを、ようやく、四十半ばにしてね、何編も何編も詩を書いた後で、意識的に考え始めたような気がしたんです。

小池 ああ、そうですね。

四元 だから、ついその前までね、小池さんの詩の中に出て来るノンセルフなっていう言葉を、非常に軽々しくぼくは使ってたね。それは、ジョン・キーツっていう若死にしたイギリスの詩人が、詩人っていうのはからっぽなものなんだよ、と。詩的なものとは、世界の雲とか海とかの輝きにあつて、詩人自体は詩的なものでもなんでもない、あれはからっぽなものなんだ。からっぽであればあるほどいいんだ、と。それが詩人の力だ、みたいな言い方をしますよね。詩人の能力っていうのは、自分をどれだけからっぽにするかだつて。で、ぼくはかなりそれを真に受けてたんだけれども、おそらく、キーツが長生きしたら、そうは思わなくなるんじゃないかと思うね。

小池 そうかしら。そうですね。

四元 からっぽの自分を自分として成り立たせている主旋律みたいなものがないと、それはどっかに飛んでっちゃうような気がし始めました。

小池 ああ、そうか。

四元 だから、そういう意味で、この対詩っていうのは、まだ続いてるからこの先どういう展開を示すのかちょっとわからないんだけれども、何かひとつの転機であったことは確かで、だんだんそこで最初言つたみたいなの、孤立してるっていうことと、それから、つながるっていうことが、自分の中でよくわかんなくなってきたんです。

小池 ああ、そうなんだ。おもしろいですね、今のお話。私も、その、内面を信じてるって言われると、確かにそうなのかもしれないんだけど、詩を書いているときは、本当にからっぽのようになっているっていう感じがある。それは、何なんだろう。

四元 昨日もらった雑誌の中の、新しい詩でしよう、「箱」っていうの。これ読んでみると、「キンバラトキオ」っていう男が出てきて、その「キンバラトキオ」は、「空き箱を見るとぞくつとする。空き箱が好きで集めているうちに、空き箱を自分でも作るようになった」とか。「トキオはつくづく」と、空き箱の中の空を見る。何もない箱の中が、キンバラトキオの、全現実世界である。」もしかしてこれ、自分のことを書かれてるんじゃないかって、一瞬おびえたりしたんだけど。(笑)

小池 (笑) 空き箱に、私、すごく惹かれるんで書いたんですね、きつとね。何にも入ってないからっぽの箱のことをとにかくか書いてみたかった。四元さんは自分のことかもしれない、つて言つたけれども、わたしもちょっと、自分自身に重ねるところはありました。でも、あんまりそういうふうに対照して考えるところはまんなくっちゃやうと思つて、だから、空き箱っていうものに惹かれてる男性を主人公にした。からっぽとか、言葉を書いているけど言葉が全くない状態、喋り、喋むっていうこともそうだけれども、そういう状態にあこがれるっていうのはあるかもしれないですね。

四元 そうだよな。田口犬男が、小池さんの「小池昌代詩集」(現代詩文庫一七四、二〇〇三)の中で、小池さんのことからぼだつて言ってるから、ぼくはちょっと意外なんだけどな。

小池 ああ、そう?

四元 だからそういうところは、絶対あるんですよ、ひとりの詩人の中に。決して対比してるわけではなくって。

インターネット連載詩

四元 そういうことを考えてる最中に、朝日新聞の方から、インターネットで詩を書いてみませんかというのがある、もちろんぼくはやりたいですよ。やりたいんだけど、注文としては、あんまり文学文学した詩じゃなくて、みんなにわかりやすい、もつと言え、若いころ書いた詩の書き方、つまり、それこそ自分を棚上げて社会の成り立ちをおもしろおかしく言葉にする、そういう注文が来た。で、ぼくはちょっと悩んだのね。つまり、ようやく主体性に根ざして詩を書く書き方を発見しようとしている時に、退行してしまっているのか、みたいな。それで、悩んだんだけど結局ね、引き受けたんですよ。でも、手法的には前と似てるんだけど、やはり自分としては、他者に託して詩を書く時、その他者と自分の中で絶対重なる部分はあるはずだから、その重なる部分だけに立脚して、そして、他者の語り口で詩を書く。そういうことで、自分というのを完全に消し去らないような書き方ができないもんかと思つて。

小池 あの、この朝日の連載詩は、すばらしくおもしろかったです。短い詩ばかりなんですけれども、現代のテーマがすごくいっぱい込められているんですね。ひきこもりの子供のこととかね、拉致事件なんかもテーマにして。なかなかね、詩でそういうヴィジュアルな現代のテーマを入れるっていうの、すごく難しいんですよ。現実の中で起きていることとか、起きた事件を詩に書くつて、とても難しいんですよ。それをまずやっただけっていうことに驚いちゃったのと、それと、全部ね、すごく悲しいんですよ。読んでると、またね……、あれは、自分が撮った写真ではないですよ？

四元 あれはちがうね。

小池 ちがうのね。写真が必ず付いていて、あれはまだ読むこと

できますか、ネットでも。

四元 いや、もうネットはおしまい（実際にはまだ「アサヒ・コム」にて掲示中 www.asahi.com/culture/circus/）。けど、こ（展覧会の会場）でちゃんと再現してくださってます。

小池 あ、ここで見られる？ あの、彼の朗読が、地声の朗読が入ってるんです。本人の声を聞きながら画面に出てくる詩のことばを追っていったんですが、それはとっても新鮮な詩の読み方で、声が届けるものつて、活字と違うんです。夜中に読んで、泣いてしまいました、本当に。ちょっと、読んでみてください。

四元 これはね、全然泣かないですけど。もつともこの詩の主人公になった人にとっては切実な問題で、泣いてましたけどね。

分数

せんせいもパパもママも どうして

ここにリングゴがひとつあるとしよう
つていうの？ ここにはリングゴないじゃない

きのうおばあちゃんかせんぶたべたじやない
デパートでたかいおかねをだしたのに

ふじスーパリーのよりまずいっていったじやない
ここにはもうないものを

どうしてわつたりしなげばならないの？
はんぶんにはわつたらにぶんのいちで

そのまたはんぶんはよんぶんのいち
だからなんなの？ どっちのほうがおおきいか

きかれてもわからない だってそれは
どんなリングゴかによろ

もしもすなつぶくらのリングゴだったら
ふたつにだつてきれないじやない

四元康祐

むかし パバ いったよ

ひやくよりもせんよりもまんよりも

このよで1がいちばんおきい なせなら

それはいちどもきられたことがないからだつて

わたしそのことをずつとおぼえてる

わたしまだきられたくない

それよりスイカきろう それからさかだちして

いっしょにちきゅうをもちあげようよ

*「声の曲馬団」のシリーズとして書かれた作品。

「アサヒ・コム」には連載されていない。

という詩です。あんまり悲しくないですけどね。

小池 今ね、けっこう泣きそう。

四元 そう？

小池 やっぱり、「1」っていうのが、響きましたね。「きられたことがない」。どこでしたっけ。

四元 「このよで1がいちばんおきい」「それはいちどもきられたことがないからだ」

小池 そう。ああこれは、すごく響く言葉ですわね。なんか今ね、

りんごのことなんだけど、詩そのものごと、poetryのことを、

言ってるような気もした。さつき、「全体を瞬時に覆う」っていう

ようなことを私、詩の中で書きましたけど、どうしても切れない、

割れない、核みたいなもの、それこそ人が信じられる、分割

できない全体。そのイメージが、私にはとても感動を呼びます。

四元 だからこれも、子供の世界を表現したいっていうことじゃ

なくって、むしろ、今小池さんがおっしゃったような形で自分の

中にあるものと、それから子供の世界と、ちょうどその重なる部

分に自分としては詩の根っこが降りてるんじゃないかと思うの

ね。若いころ書いた詩は、あまりよくはそういうことを考えなか

った。子供のことを題材にしてなんか詩にしてやろう、と思うと、そこに重なる自分っていうものはなかったと思いますね。

小池 ああ。じゃ、これからすごく楽しみな。今、四元さん、ド

イツにいるけれども、日本にいる私たちがちよつとびつくりし

やうほど、どんどんどん書いている。浅間山の噴火ではない

けれども（笑）、噴火状態ですが、ちかい将来、また違う噴火が

来ると思うので、さらに皆さんにも楽しみにしてほしいと思いま

す。

詩と生活

四元 で、この話のテーマの「孤立と連帯」ということに戻るん

だけれども、ちょうどこれを発表し始めて、全く反響がなかった

時に、小池さんが新聞で取り上げてくださいましたね。その見出し

が「孤立と連帯」（小池昌代「詩歌のこだま——四元康祐の孤立

と連帯」、日本経済新聞「二〇〇四・五・九」で、「声の曲馬団」

の詩は、他者に通じているんだけど、それは安易な通じ方ではな

くて、同時に孤立したものである、そしてそこには「死」って

いうものがあるんじゃないかっておっしゃってました。

小池 ああ、そうですね。

四元 非常に嬉しかったんだけど。どんなこと書いたか覚えてる？

小池 覚えてない。まったく忘れちゃった。

四元 覚えてないみたいね。だいたいその「孤立と連帯」っていうのが、自分の書いたものを見出しだったっていうことを、昨日

よくが言うまで全く理解してなかったでしょう？

小池 そうです。忘れてました。（笑）

四元 やんなっちゃうんだよね。こっちは、書いてくれたあれに

ついで話そうっていうシグナルを送ったつもりだったんですけど。(笑)

小池 こめんなさい。

四元 ちよつと、小池さんの昔書いた詩を読んでみない？

小池 ああ、そうね。何がいいかしら。

さつき、ヴィオラの話が少し出てきましたが、ヴィオラって中間音なんですよ。ヴァイオリンとチェロのちょうど真ん中。大きさも真ん中くらいですし、あごにこうやってはさむんですけど、音がちょうどこう、中間に浮いているような、高くもなければ低くもなく、そのまさに中間っていう音が、私にとつて本当に魂の音程みたいな感じがして。ヴィオラの音域っていうのは、本当に精神的な音域だと感じます。その中間っていうことに結びつけて言うと、今、私も四元さんも同じ年ですけど、「世界中年会議」っていう詩集もあつたけど、人生の本当に真ん中くらいの年齢に差しかかっています。若くもなければぐんと年老いているわけでもない。何かこの、中間の持つエネルギーっていうのがあるような気がするんです。そもそも詩が、中間に浮いている、どこにも所属できずに浮いているもの。詩は若い人の、若い者のための文学みたいな言われ方もするけれども、もしかしたら、いま、本当に詩をこれから書ける、もしかしたら、書くべき年齢に居るのかもしれないな、なんて、自分を励ますためにも、また、彼の書いた詩を読みながら、そんなふうにも考えたんですけど。やつぱり、中年以降は、死、*obituary*の方の死っていうのが、すごくイメージの中に出来て来て、でもやつぱり若いころの詩っていうのは、本当に脳天気な、ただただ言葉をおもしろがって書いていたので、死なんてほとんど出て来ないっていうのが、振り返って思うことです。だから、自分にとっては何となく物足りない詩がいっぱい実はあるんですけど。ただ、せつかく今四元さんが言ってくださったので、自分にとつて転機になった詩を一編読んでみたいと思

ます。これは、三十代後半、人生でもちよつとした転機があつたときにできました。今まで書きあぐねていた詩が、ちよつとここで、あ、こんなふうにして詩を書いて行けばいいんじゃないかなあと、結び目が解けるような経験をしたんです。「永遠に來ないバス」っていうの、ひとつだけ読んでみます。

永遠に來ないバス

小池昌代

朝、バスを待つていた

つつじが咲いている

都営バスはなかなか來ないのだ

三人、四人と待つひとが増えていく

五月のバスはなかなか來ないのだ

首をかなたへ一様に折り曲げて

四人、五人、八時二〇分

するとようやくやつてくるだろう

橋の向こうからみどりのきれはしが

どんどんふくらんでバスになって走ってくる

待ち続けたきつい目をほつとほどいて

五人、六人が停留所へ寄る

六人、七人、首をたれて乗車する

待ち続けたものが來ることはふしぎだ

來ないものを待つことがわたしの仕事だから

乗車したあとにふと気がつくのだ

歩み寄らずに乗り遅れた女が

停留所で、まだ一人、待つているだろう

橋の向こうからせり上がってくる

それは、いつか、希望のようなものだった

泥のついたスカートが風にまくれあがり

見送るうちに陽は曇ったり晴れたり

そして今日の朝も空へ向かって

埃っぽい町の煙突のはひ

そこからひきさかれて

ただ、明るい次の駅へ

わたしたちが

おとなしく

はこばれていく

『永遠に來ないバス』一九九七

四元 この詩を書いたのはいくつの時でしたか。

小池 三十六、七歳ですね。

四元 三十六、七歳。その時に、詩人として生きて行くという氣持が込められているわけだね。

小池 そうね。まさに、自分が生活して行くことの中に、詩があるんじゃないかなっていろいろ考えた。

四元 おもしろいのはさ、生活の中の詩を表現しようとする、バスには乗れないわけでしょ。乗り遅れた女として立ち止まらなきやいけない。そういう孤独な女だったり、あるいは老婆だったり、ちよつと離れたところで座り込んでるイメージが、このあといくつか出てきますね。で、おもしろいのは、さつき言った宙ぶらりんな場所にいるっていうことに関連して、何かを表現しようとする、そこに完全に入っちゃだめで、そことある程度距離を置かなきゃいけないんだけど、まさにその、三十代後半にね、小池さんはまた結婚をし、四十過ぎて子供を産んで、生活の中に真つ向から入って行く。これはある意味で矛盾することを同時にやろうとしてますよね。その緊張感みたいなものは、興味深いっていうか、ぼく自身の問題でもあると思います。

小池 そうねえ。四元さん自身も、そういう詩をたくさん書いてますもんね。

四元 それは、昔は意識しなかったんだけど、やはりその、主体性みたいなことを考えたり、詩を書く自分はその時どこにいたのかっていうことを考え始めると、急に切実な問題になって来るね。小池 引き裂かれるっていうのは、ちよつときれいな言い方ですけどね、詩のことを考えていて、そこにすーっと入って行くと、放心状態が生まれるというか、やつぱり日常生活の中で、特に女の場合はね、子供がいて、あるいはまた結婚生活をしているっていう状態っていうのは、八つ裂きにあつてるような感じね。氣が散るっていうか。あ、雨が降ってきたりしよう、布団干してるわ、とか、今日の何時までにご飯作んなきゃ、とか、冷蔵庫に玉ねぎが一個残ってたから今日のメニューはあれにしようかしら、とか、あ、そろそろ保育園に迎えに行かなくちゃ、とか、瞬間瞬間いろいろな雑念が入って来るわけですよね。で、あつちにも氣を配りこつちにも氣を配り、ああここ、床を見ればこんなに汚れてる、ああどうしよう、時間がない。そういう生活で、その中で、すーっと詩に、詩を書くこうっていう瞬間に、自分が入って行っちゃう。一人になるから、物理的にも家族と自分を切り離すけど、例えばテーマが子供だったりすると、精神的にもどこか切る。非常に距離をもって冷たく書いたりするんです。詩を書くことも日常のなかの行為であつて、そこだけが突出した聖なる時間ではないのだけれども、残酷なことしてるんじゃないかっていうような、ちよつとつかつかいい言葉で言っちゃうと、罪を犯してるんじゃないか、って思うことはありますね。そういうような感覚っていうのは、日常生活を送ること、そして詩を書くことっていうのを同時にやつてる中で、時々感じることですね。本当に。

四元 そういう、詩を書くというものが持っている毒とか悪っていうのをね、おそらくぼくらみたいに比較的日常生活に立脚した詩を書くの方が、意識せざるを得ないようなところがあるのかもしれない。もつと難解な、観念的な詩を書いてれば、その辺切

れることができるかもしれないけれども。
小池 ああ、そうね。きれいにね、切れてるかもしれない。

孤立と連帯（質疑応答より）

質問…「孤立と連帯」ということについて、もう一度整理して、
というか、キーポイントでお話をしていただきたいのですが。

小池 あの、難しいんですけども、やっぱり私たちは、それぞれ
かけがえのない、絶対的な私っていうのを、それぞれみんな生
きてるわけですよね。そして、でも、その個っていうんでしょう
か、決して他の人になり代われないものを、抱きかかえながら生
きていて、その中で連帯を求めている。確か、永瀬清子さんとい
う人の詩集の解説の中で、同じようなことを読んでような気がす
るんですが、彼女の詩もそうなんです。連帯を常に求めながら、
人とつながろうつながろうっていう希求を常に心の中に持ちなが
ら、同時になかなか簡単に人とつながれない。そしてその矛盾の
なかで詩が輝いている。詩やその個人の命が輝いている時とい
うのは、その人が実は、なかなかつながらないっていう苦しみ
を抱きながら、自分の個、あるいは孤立っていうものを抱きしめて
いるような状態にあるときなんじゃないか、ということですよ。そ
の苦しみのさなかに、その人の命がひかひかかと輝く。詩も、孤
立のなかで輝く。決して、ああ連帯だ、みんなとつながってる、
あの人もこの人も、つながってるっていうような、安定した
幸せな状態の中で、命っていうのは必ずしも個の輝きというもの
を発揮できないということがあると思うんです。詩も同じです。
そういうような何かすごく矛盾に満ちた世界の中で、私たちが一
人一人生きてるような気がするんですね。答えになっているとは思
わないんですけど、そんなようなことを、「孤立と連帯」って

いうことから考えることがあります。

四元 大岡信の著作の中に、「孤心と宴」という本がありますね。

これは、連詩や連歌の伝統について書かれたものだけれども、こ
れは今まさに小池さん（小池）がおっしゃった逆説について書かれてい
ることで、本当に宴として人と分かち合おうとすると、それをよむ
詩人は、孤心に、つまり、一人だけの心の中に立ち戻って行かな
いと通じないんだ、というようなことが、基本的には書かれてい
る。それは何も書くだけじゃなくって、我々が詩を読む場合も、
本当にいい詩を読んで、詩が好きだ、と思ったときは、一方でそ
れは非常に幸福な状態だと思いますけれども、人間的な連帯とい
う観点から見ると、そのときはどんな友達もおそらく必要として
いないだろうし、恋人だっただけで必要としていない、本当にその自分
の心の中の、深みの中で、たった一人になっている状態だと思
うんですね。だから、そうい
うものを教育問題だとか、
あるいは人間関係だとか、
どんなふうに応用して解釈
すればいいのか、ちょっと
ぼくはわかりませぬけれど
も、少なくとも詩を読んだ
り書いたりするっていうこ
との中で、そういう一種の
アイロニーというか、逆説
に気付かされるということ
はあるんだなあ、と、若い
ころぼくはぼんやり思っ
たけれども、今は実感とし
て感じるどころがありません。

